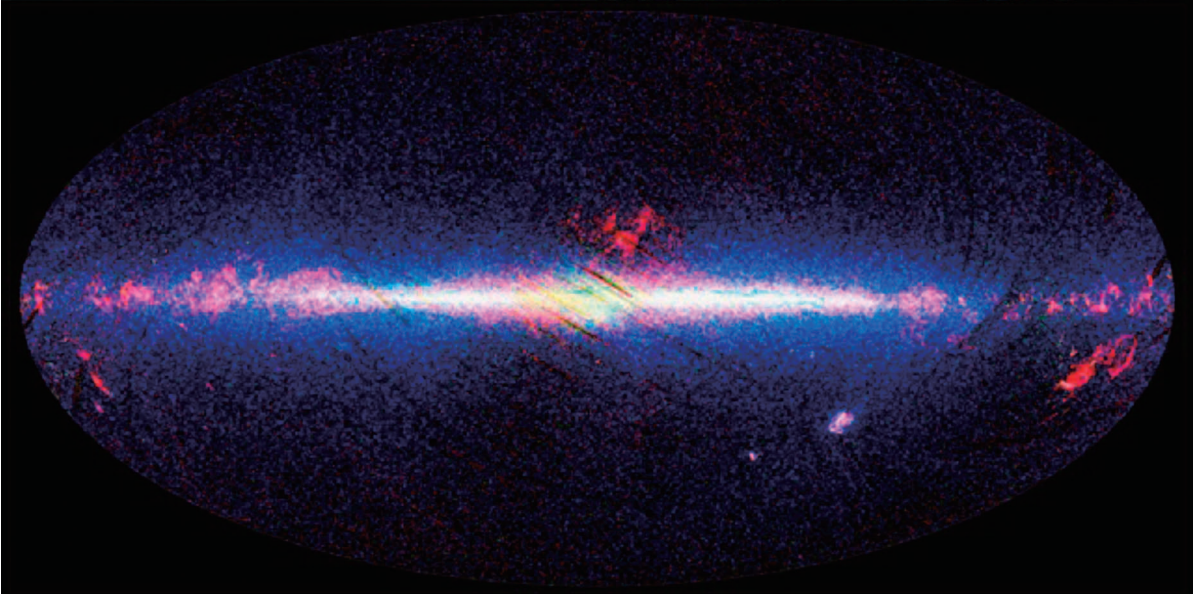


世界の鏡から 天の鏡



世界の鏡から 地球の顔を見る



【巻頭グラビア説明】

世界の鏡から

望遠鏡。それは天体からの電磁波を検出する最先端の科学技術を駆使した装置。しかし一方で、風景にとけ込んで凛々しくそびえるその姿は美しくもあります。国内外で活躍するさまざまな波長帯の望遠鏡を紹介する新シリーズです。

赤外線天文観測衛星「あかり」(表ページ)

打上前の最終点検を行う「あかり」衛星(左上)。2006年2月打上の日本初の本格的な赤外線天文観測衛星。「銀河がいつどのようにして生まれ、現在の姿に進化してきたか」「星の誕生とその周りで惑星がどのように形成されたのか」というプロセスの解明等を目的とする。口径68.5 cmの望遠鏡(右上)を、絶体温度で6 Kまで冷却して搭載し、非常に高い感度の観測を行った。その成果の一部は、約130万個もの天体を含む「あかり赤外線天体カタログ」として公開された(下)。

大学VLBI連携観測網 (Japanese VLBI Network=JVN) ① (裏ページ)

国内の7大学(北海道、筑波、茨城、岐阜、大阪府立、山口、鹿児島)と国立天文台が情報通信研究機構、宇宙航空研究開発機構、国土理院の協力のもとで運用するわが国のVLBI(超長基線干渉計)観測網。その構成局を順に紹介します。

北海道大学 苫小牧11 m電波望遠鏡

理学研究院が所有する口径11 mの電波望遠鏡で、JVNの最北端の局。北方生物圏フィールド科学センター苫小牧研究林内に設置されている。周波数21.3-24.3 GHz帯でのVLBI観測とともに単一鏡としてもアンモニア分子や水分子のスペクトル観測を進めている。操作は約70キロ離れた札幌から遠隔で実施。観測を主に実施する冬期は好天に恵まれ、道内でも積雪量は少ないが、そこは北海道ゆえ冬景色は左下の写真のように。右下は望遠鏡の脇に建つ観測制御室の内部。

《ご投稿募集》

編集委員会ではこのシリーズにふさわしい記事を募集しています。国内外で活躍するさまざまな波長帯の望遠鏡を紹介する新シリーズ「世界の鏡から」が始まりました。所有されている望遠鏡、利用されたことのある望遠鏡などの写真と、設置されている場所やどのような観測がなされているか、あるいは得られた成果など200字から300字程度の簡単な解説記事の案がございましたら、編集委員会までご連絡ください。巻頭グラビアになりますので、風景にとけこむようなきれいな写真をお待ちしております。